第６９号　2015年６月30日

東日本大震災 復興･支援活動ニュースレター
カトリック仙台司教区・カリタスベース

（宮古･大槌･釜石･障がい者センターかまいし･大船渡･米川･石巻･福島デスク･原町･もみの木･CTVC）

発行人：平賀徹夫　編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
TEL022-222-7371　Fax022-222-7378
1）義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2）支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

６月１日、ＣＴＶＣカリタス原町ベースが開設３周年を迎え、その前日に記念感謝イベントが行われました。石巻ベースでは、約３年半続けているオープンスペースの利用者「1万人目」をむかえました。また、仙台教区サポートセンター子ども支援担当が、「震災を体験した子どものグリーフサポート」と題して研修会を開催しましたので、ご紹介いたします。皆さまの支えによって、継続的に各地での活動を続けられていることに感謝いたします。ありがとうございます。　次号は、全国会議についてご紹介予定です。

地域のみなさんを招いての CTVC カリタス原町ベース 開設３周年記念感謝デーに参加して

仙台教区サポートセンター　小野　武

CTVC カリタス原町ベースは、６月１日で３周年を迎えました。その感謝デーが、前日の５月３１日に開催されました。

当日は、雨の天気予報でしたが、夏のようなとても暑い、風の強い日でした。開催時間の午前１１時少し前から仮設住宅、近所、社協、教会、ボランティア、他のベースの方々が駆けつけ、総勢 200 名ほどの参加となりました。

１０時半頃原町ベースに到着すると、さっそく良い香りが漂ってきました。シスター方が、会議室兼台所で朝早くから“シナモンボール”を作っていたのです。今回の感謝デーは、第一部は食事のおもてなしタイム、第二部は演奏と民謡に合わせての踊りという二部構成になっていました。

第一部の大勢のみなさんへのお食事は、スタッフ、シスター、ボランティアのみなさん、そして幸田司教さまも一生懸命に準備され、ビビンバ、そうめん、シナモンボール、フランクフルトなどが提供されました。参加された方々は、談笑されながら食べておられました。また、ベースのすぐ隣のおばあちゃんとお孫さんも出席され、ビビンバを召し上がっておられたので、よかったなと思いました。

地域の方々が一堂に会することが少ないようで、久しぶりに再会した方々は、懐かしいお話で和んでおられました。

ご当地の歌にあわせ、輪になって踊りました

満腹感を味わった後、第二部が始まりました。サクソホンとピアノの合奏でお年寄りの方もお馴染みの「川の流れのように」「蘇州夜曲」などの名演奏に、参加者のみなさんが大きな拍手を送っていました。そしてご当地の「相馬盆歌」「相馬二遍返し」に合わせて、踊りの輪がつくられました。私も後から踊りの輪に加わりましたが、前の方の手と足の動きに必死になって合わせようとしましたが、残念ながら半分も出来ませんでした。

感謝デイに参加された方とお話しする機会があり、お一人は、福島第一原発の放射線が心配で、仙台のお姉さんのところに１年半避難し、戻った方でした。「仙台は美術館･博物館そして大きなデパートがあり、退屈しなかった。原町は、外に出ても見るところもなく、さみしいので、カリタスさんの“お茶っこ”やイベントが楽しみです」とおっしゃっていました。

もうお一人の方は、CTVC がベースにする土地を探している時から関わりのある人で、ＣＴＶＣのスタッフの方の盆踊り姿を見て、「うまいだけでなく、心がこもっている」と地元に馴染んで活動していることを歓迎していました。また、「お年寄りの方は、住み慣れた土地が一番だが、原発で補償がもらえる人、もらえない人がいるので人間関係が難しい」と話しておられました。

参加された方々は、全国からベースに支援物資として届いたたくさんの衣類やセトモノから欲しいものを選び、家路につかれました。

原町ベースでのボランティア活動は、原発の影響地域で、帰宅可能となったところと、まだまだ見通しが立たないところ、そして仮設住宅から復興住宅への移行時期の中で展開されて行くことなると思います。その中で、地域の方々への感謝と共に歩むための結びつきを深める場としての心意気を感じた今日のイベントでした。

イベント開始前、食事準備の様子

利用者「1万人目」を迎えて

カリタス石巻ベース　　中村　愛

石巻ベースでオープンスペースが始まり、約３年半を迎えました。毎日毎日記録に付けていた利用の人数が、このたび、一万人を迎えました。「どなたが一万人目になるのかなぁ」と思いつつ、一日一日楽しみに活動を続けていました。

そして、月命日でもある６月 11 日。利用者一万人目を迎えることが出来ました。一万人目になられたのは、米川ベースでボランティアをなさっていた滝沢英一さんでした。滝沢さんは、震災後、年に一度、米川ベースにボランティアに来られ、今回も一週間の予定でボランティアに参加されました。この日はちょうど、米川ベースのスタッフと視察に来られたのです。石巻ベースも石巻市も初めての訪問だったそうです。

利用者１万人目となった滝沢さん

今回のボランティアで滝沢さんは、南三陸町のさんさん商店街でも地元新聞社の取材を受け、新聞にも載ったと話されていました。「一生分の運を使い果たした」と笑いながら一言。

一万人目を迎えた今日も、いつもと変わらず利用者の方々が来られ、お茶を飲みながらお話をしたり、小物を作ったり、新聞を読んだりして過ごされました。

以前、石巻ベースで活動されたことがある方が、最近ボランティアに来られた際、次のようなことを分かち合ってくださいました。

「オープンスペースが始まったころ、何日も利用者が来られなかったり、一人しか来られなかったりした日もありました。しかし、今日、ベースにいて、たくさんの利用者の方が来るようになっているのを見て、嬉しいですね」と。

東日本大震災がきっかけで設立された石巻ベース。これまで活動に参加してくださったボランティア、スタッフの方々、全世界から被災地を支援してくださる多くの方々の支えによって、また地域の方々に助けていただきながら支援活動を続けて来ました。その結果が地域の憩いの場になっているのは間違いないと思います。

オープンスペースでの様子

これからも必要な支援を見つめつつ、地域の方々と共に歩んでいけるベースでありたいと思います。そして、２万人目の利用者が来られる時には物理的な復興も心の復興も進んでいることを願っています。

2015年度　カリタス石巻ベース　スタッフ

震災を体験した子どものグリーフサポート研修
～震災から５年目、これから私たちができること～

仙台教区サポートセンター　長島　明子

５月19日（火）岩手県上閉伊郡大槌町の大槌中央公民館において、仙台教区サポートセンター主催「震災を体験した子どものグリーフサポート」と題し、研修会を開催いたしました。当日は、宮古市、大槌町、釜石市、大船渡市の岩手県沿岸の被災地で活動する子ども支援団体や、教育委員会の方々がご出席くださいました。

講師の大塚光太郎先生

特定非営利活動法人「子どもグリーフサポートステーション」職員の大塚光太郎氏を講師にお招きし、「子どものグリーフとは」、「トラウマとグリーフの違い」、「グリーフを抱えている子どもたちを支えるために」、「震災から５年目以降の子どもたちを支えるために」、と５つの柱に分けてお話いただきました。

「グリーフ」という言葉を初めて聞く方もいらっしゃるかと思いますが、グリーフとは喪失体験に伴うあらゆる感情、例えば、悲しみ、哀惜、怒り、罪悪感などを指します。また、グリーフは自然な正常な反応であって、治療などが必要なトラウマとは違う反応であり、誰しもに起こりうることだそうです。子どもたちが、成長していく中で、このグリーフは様々な形に変化し続け、複雑化していき、グリーフワーク（グリーフに適応していく過程）が上手くいかなかったり、サポートが不足した場合には、頭痛や、不眠、だるさなど「身体的に反応」するもの、悲しみ、怒り、不安、抑うつ、罪悪感など、「情緒的に反応するもの」、泣く、退行、攻撃的な行動、引きこもり、何事もなかったような振る舞い、学習に集中できない等、「行動的・社会的反応」が起こることもあるそうです。

真剣に、興味深く受講されていました

この研修会に参加して、私がいちばん感じたことは、東日本大震災で、大切な人や、大切なものをなくし、いくつもの喪失体験をもつ被災地の子どもたちは、大人のように知識や体験がない中で、一人ひとりさまざまな思いを抱えながら日々の生活を一生懸命に生きています。しかし、私が被災地の子どもと接するようになって３年経ちますが、今もなお、不登校の子どもが増え、学力の低下、身体能力の低下、暴力的行動などの問題が絶えず続いている状態です。子どもに「勉強しなさい、運動しなさい」と言っても、心がついていかない子どもにとって、その言葉はきつい暴力的な言葉にしか聞こえないのではと思います。子どもの今の気持ちを汲み上げ、共感、受容し、サポートしていくことの必要性を、この研修会で深く感じました。

また、印象的だった研修内容の一つに、子どもに寄り添う中で、「評価しない。勝手な解釈をしない。」ことが重要だと教わりました。つい、子どもに「すごいね。上手に出来たね」などと、声をかけたくなることがありますが、「上手だね」と言われた瞬間、子どもは次も上手くやらなきゃ、とか、本当はぐちゃぐちゃな絵を描きたかったのに、などと心の中で思っていた行動や表現をストップさせてしまう可能性があるとのことでした。学校や家庭で評価づくめの子どもたち、遊ぶときぐらいは評価しないで思う存分自分を表現して欲しい。ここには、学校や家庭では補えないサポートがあるのだと思います。子どもは、自分の本当の気持ちを汲み取ってくれる人であれば、どんどん話し出し、本当の胸のうちを明かしてくれるのかもしれません。子どもの声にならない声を引き出すことができるような寄り添いができればと思い、また、この子どもの寄り添いは少しの訓練があれば誰しもが出来ることなのだと、色々気付かされる大変貴重な研修会でした。

色々なワークを交えて、子どもとの寄り添い方や技法などを体験しました。